

2015年4月13日掲載

知覚過敏について
種類ごとに違う治療法

冷たい飲み物を飲むときや冬場の水道水が冷たい時期など、歯がしみるという方が歯科医院に行ってみると、「むし歯ではなく知覚過敏です」と言われたことがあると思います。むし歯ではないのに歯がしみる、これは困ったことです。むし歯で歯がしみるなら治療すれば治るのですが、そうでないならどうしたらよいのでしょうか。

患者さんには知覚過敏と説明しますが、知覚過敏の中にも種類があって、それぞれ治療方法も変わってきます。

通常の場合、なるべく保存的な対症療法から始めます。知覚過敏予防の歯磨き剤の使用、フッ素剤の塗布、しみる歯の表面のコーティングなどです。

また歯の根元の一部が削れてしみる原因になっている場合には、削れている部分にプラスチック剤を詰めるという方法があります。

症状がひどい場合には、歯の神経を取る処置を行う場合もありますが、知覚過敏ということだけで歯の神経を取ることはまれで、適宜判断されます。

知覚過敏の処置は対症療法がメインになりますが、原因を探ることも必要です。歯の根元の部分が削れている状態を「くさび状欠損」といいますが、これまでは歯磨きの仕方が悪いことが原因といわれてきました。現在ではかみ合わせに問題がある場合、くさび状欠損が発生するといわれています。むし歯ではないのに歯がしみる場合、かみ合わせの診査をしてもらうことも重要です。